東方想譲心

ニコウミ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方想譲心

【Ｎコード】
Ｎ６８８０Ｚ

【作者名】
ニコウミ

【あらすじ】
鷹島和樹、通称カズは大学生と言う職業を終え「さぁ、明日から自宅を護るぞ♪」　と言う立場におかれていた
そんなクズ野郎にあるお仕事の紹介がきた
「ある家に住むだけの簡単な御仕事です」
「うさんくせＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥＥ」
そんな思いも笑い飛ばすかのように無理矢理契約してしまった和樹のめのまえはまっくらになった

胡散臭いババア系美少女（笑）に言われるがまま着いていった先は
和樹にとって笑えない日常の始まりだった

※突然修正を行う場合があります、そしてその修正で話が少し変わる可能性がございます、ご了承ください

プロローグ　※修正済（前書き）

前書きと言うことで
作者は東方ｐｒｏｊｅｃｔは一応プレイはしております
ただ二年前です（・ω・、＝）

この作品に最強やチートなどは敵のみに存在します
主人公は人にしたら少し強いくらいです
どのくらい強いかと言われれば犬より強くて熊より弱いです
分かりづらい？
じゃあ子供より強くてボフサップより弱いです

つまりそう言うことです

東方ｐｒｏｊｅｃｔの作品を書くのは初めてですが小説自体は初めてではないです
ではお楽しみください

※修正しました

プロローグ　※修正済

「笑えよ、ベジータ…」

雪がパラパラと降り続く真冬の夜、ある青年が茶色の封筒を片手に公園のベンチに佇んでいた

「誰がベジータよ」

その青年の隣には同じくらいの年の女性が寒そうに手を擦りながらジト目で青年を睨む
その女性は普通過ぎる青年とは真逆に周りより数倍もかけ離れた美貌、つまりはかなりの美人だ
綺麗な金髪にハーフ系の整った顔は幻想的な美しさを放っていた

「メリー、凄く驚くかも知れないんだが聞いてくれ…実は」

「落ちたんですね、分かります」

「……笑えよ、ベジータ」

「下等民族が…とでも言って欲しいの？現実を見なさいよ」

メリーと呼ばれた女性は青年が持っていた書類を奪うとパラパラめくり始めた
そして徐に溜め息をついた後すぐ隣にあるゴミ箱に興味が無さそうに投げ捨てた

「ちょっと七つくらいボール探してくる、探さないで」

そんなメリーを見た青年はウンザリしたように右手で顔を覆い息を吐きながら呟いた
そう、この青年はただいま就活中で色々な会社の入社試験を受け回ったが

「えぇ…最初は簡単に受かるなんて思い込んだ俺が馬鹿だった……30件も落ちるとさすがに希望が見えなくて命がマッハなんだけど…」

この青年、どこにも受からないのだ
しかも今日受けたこのクリスマスイブが記念すべき30件目なのであるさ
まさにクルシミマスイブ

「ちなみにどんな会社受けたのよ？」

「刺身の上にタンポポを乗せる工場だ」

「……あれはタンポポじゃないわよ……」

「え？」

「て言うかそれ手作業じゃないわよ…」

「えぇ……？」

もはやなにも言えなくなった青年、和樹はそのまま横に倒れメリーの太ももに倒れる、所謂膝枕をいきなり断りもなくした和樹に対してメリーは溜め息をついた

「ちょっと！断りもなく女性にこんなことして……流石の貴方も落ち込んでるの？」

「あぁ…ごめん…ちょっとだけ人の温もりが欲しい…」

項垂れるように和樹は呟く
メリーはそんな和樹を見てなにも言えず、殴ろうとして中に浮かせていた手を和樹の頭に優しく落とした
本来、和樹と言う男がこのように人に素直に甘えるのは幼馴染みであるメリーが見ても始めてに近い行動だった
そんな和樹に渇を入れるつもりだったメリーは言葉に詰まりながら頭を撫でた

「それで、どうするのカズ？」

「さっぱりだ……どうしようもない…」

「そう、まぁ来年一月までに仕事が決まらなかったら私が雇ってあげるわよ」

そうメリーは少し顔を赤くしながら言った、確かにお嬢様なメリーなら使用人として一人くらい雇えるかも知れないが、それは男として幼馴染みに雇われるとかなんか情けない思いが来てしまう

「いや……なんか男として情けないとかそんなレベルじゃなくて泣きそう…」

「プライドなんか犬にでも食わせなさい、そして私に膝まずいて忠誠を近いながら惨めに靴を舐めなさい、そしたら餌をあげるわ」

「お前に雇われた未来が想像出来るんだが、光が見えない」

「あら？私の使用人は明るい未来しかないわ」

そう言いながらメリーはクスクス笑った
そんなメリーに苦笑いをしながら幾分か気持ちが落ち着いてきた、
メリーはいつもこうなのだ
なんだかんだ言いながらしっかりと救ってくれる幼馴染み、神様が
端正込めて作った人のように出来た女性

「メリー」

顔を見るのは恥ずかしいのか和樹はそのままの体制で呟いた

「なに？」

耳が赤くなっている和樹に少し笑いながらメリーは優しく問い掛け
た、そんなメリーの問いかけにこう言う場面に慣れていない和樹は
さらに恥ずかしくなってくる

「そのだな……」

「なによ？」

言いたいことは簡単なのだ
和樹と言う男は何時になってもメリーに助けられてばかりだと、そ
れなのにろくに恩も返せない、なにもしてやれない、助けてやった
記憶もあまりない、頼りっぱなしでまだまだメリーに甘えてる自分
が少し嫌になって来て、それでも甘えてしまう自分がいて

「なに？和樹らしくないわ、はっきり言いなさいよ」

自分が言うことを分かってる癖にニヤニヤ笑う幼馴染みにこんな弱い男が言えるのはありきたりな言葉しかない

「いつもありがとう…」

こんな事しか言えない馬鹿な男を気にかけてくれて、恥ずかしいからありがとうまでしか言えないけど

「あらあら、どういたしまして」

クスクス笑う幼馴染みの声を聞いてると嬉しくなる自分がいるんだ、恋心ではないし、友愛でもない、なんなのか分からないけど、今はお礼だけ、そしていつかこの助けて貰っている恩を

「…必ず返すから」

メリーに聞こえないように和樹は呟く、聞こえてるのか聞こえてないのか分からないが、メリーは和樹をまた撫でた

「……どっこい正一」

「あら？もういいの？今しか味わえないメリーさんの膝枕よ？」

「いきなり悪いな、もう大丈夫だと思う」

「……そう、じゃあ」

そう言ってメリーは携帯を和樹に見せる
画面には「クリスマス限定！ビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグ！！いまなら三千円だ！お得ッゥウ！」と言う見出しに有り得ない形をしたハンバーグの写真

そしてヨダレが少し垂れた満面の笑みのメリーが不気味なオーラで和樹を見ている、否
睨んでいる

「奢りね♪」

「……えぇ？この空気でそう言うこと言っちゃう普通？」

「あら？麗しき女性の太ももを貸してあげたのよ？見あった代償でしょ？」

あぁそうだ、昔からメリーとは素晴らしい女性だったなと和樹は呆れたように溜め息をついた

人間関係って必要だよね　※修正済（前書き）

※修正しました

人間関係って必要だよね　※修正済

メリーにとんでもないハンバーグを奢らされたクルシミマスイブから二日後
俺は家でのんびりしている日々を過ごしております、就活はどうしたんだって？

「来年から本気出す…」

逃げてないよ、だだ来年から本気出すだけだから、うん、もう誰でもいいから雇ってくれないかな、なんて考えていると突然チャイムが鳴った
そう言えばメリーが来るみたいなこと言っていた、まだ昼の１１時だがやけに速いな

「すいません！！新聞の勧誘なんですけど！！」

どうやらまったく違うようだ、また読〇かな
断っても断っても次々とくるんだよな

「はいはい、ちょっと待ってください」

取り敢えず適当に断るかな、俺は玄関の前に立つと覗き穴からちょっと覗いてみた

「ついに文文。新聞現代デビューですよ……あのババアが授けたチャンスは逃してはいけないですよ…フヒヒ」

黒髪ショート、ふむ、E、いやDか？中々のレベルだ、しかも美人

じゃないか、やるな読〇
これは読〇を見直すべきだな…

まずはこの前会得した福山ボイスで印象をよくしよう、そしてあわよくば仲良くなりたい！

「ちょっ……ゲフンゲフン…御待たせしました」

「あやや…ダンディな声ですね、虫酸が走ります」

「え？」

「え？」

なんかいま初対面に対して有り得ない言葉が空耳したんだが、いや、気のせいだな
まさかこんな美人が

「あぁすいません！つい本音が出てしまいました」

直球すぎワロタ

「すいません、お帰りください」

「お邪魔しますね」

「え？いや帰ってくれませんか？」

「あやや、狭い部屋ですね」

あれ？目の前に居たはずなのにいつの間にか炬燵に入ってミカン向き始めた、あれ？確かにいま目の前に居たはずなのに

「何してるんですか、さっさと入ってきてくれないと契約の話ができないじゃねーですか」

「いや帰れよ、て言うか契約なんかしねーよ」

「いまならビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグの割引券挙げちゃいますよ？お得ッゥウ！」

「いやだから帰れよ、なに？ワンダフルケーキ型ハンバーグ流行ってんの？どう見たってあれ他店舗に差をつけるために開発した新商品だけど失敗しちゃってる形じゃねーか」

「さて契約の話ですけど」

「いやだから帰れよ」

「人の話は最後まで聞けって教わりませんでしたか？屑が」

聞き間違いじゃない、コイツ間違いなく契約取る気無いね、「いいから契約しろやッ！！」みたいなヤクザタイプだね

「あ、足は伸ばさないで下さいね、私が伸ばしますんで」

「喧嘩売ってる？」

「新聞売ってます」ドヤァ

いや上手くねーよ、逆にイライラが増したわ
目の前の美人さんは思いっきり足をのばして俺の足を蹴った、こっちを無表情で見ながらがつがつ足を蹴ったあと、やれやれと大袈裟にため息をついた

「もうちょい向こうに行ってくださいよ、足当たってます」

「分かった、喧嘩売ってるね、よし、表に出ろよ、血を見せてやる」

「あ、私は文と申します、名字は教えません、教えたくないんで」

「駄目だこいつ、早くなんとかしないと…」

そう言うと文は突然持っていた鞄から新聞らしき物を取りだし炬燵に無造作に投げつけた
コイツ契約させる気ねぇだろ

「読〇新聞？」

「違いますよ、文文。新聞です、漢字読めないんですか、ちなみに新聞を呼んだ感想はどうですか小学生さん」プスークスクス

「いま確実にイラッとした、うん、この思いだけは間違いないね」

「え？文文。新聞知らないんですか？」

「え？いやいや、知らないだろ、聞いたこと無いからな、いや自慢じゃないけど俺はネット灰人だしゲーム灰人でね、新聞なんか頼らなくても二次元の友達が教えてくれるから全然悲しくないもんねッ

！！」

「いや、泣かれても困るんですが」

五月蝿い、なんだよ、二次元の友達舐めんなよ、金色の堕天使ルシフェル（ハンドルネーム）なんかお前親友だからな、ルシフェル君のお父さん総理大臣らしいからな

「ルシフェル君ディスッてんじゃねぇぞ！」

「……あやや、勧誘する奴間違えましたね…」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

一時間後

「あぁ、うん、思い出したわ、文。ね、うん、有名だよね、知ってる知ってる」

「ですよね、あぁビックリしました、まさか知らない人がいるんだぁーなんて思っちゃいましたよ」

そう言って文はホッとしたように笑う、え？そんな有名な新聞なのか、いや、確かにここ一年くらいテレビ見てないし、ルシフェル君も最近チャットしてないけど…

これは俺だけクラスの話についていけなくてそこで会得した・シッ

タカブリ・を使うときがきたな

「実はこの家が家の新聞を契約してないことを知りまして編集長である私がここに来たんですよ」

編集長来ちゃったよ！？契約してないマンションの一室に編集長来ちゃったよ！？う、嘘だろっ…そんなにこの新聞を契約しないのは常識から外れたことなのか……ここまで有名な新聞ならその情報は確実だろう、ルシフェル君も最近チャットしてくれないから情報手に入らないし、いっそのこと契約しようかな…

「あ、あぁ、うん、そう言えば契約しようかなぁなんて思ってたんですよね、はい」

「あやや、ちょろあまですね」

「え？」

「いえいえ！ささっこの契約書にささっと書いちゃってください！！」

文から渡された紙に目を通して見る
生年月日に性別に趣味に性癖に好みのタイプからなんかどうでもいいだろってことまでびっしり書かなきゃいけない用紙だ

「これが今流行りの新聞なのか……？いや、なんか爺みたいなこと言うけど最近の流行りは分からねぇ…」

「性癖は足…ちょっと足伸ばすの辞めるんで伸ばしても良いですよ」

「くっ……性癖書くのに意味はあるのか！？」

「とかいいつつ用紙にビッシリ書いてますね」

「足、太ももの愛なら負けないんだ」

「……」

「ごめん、さすがにそんなゴミを見る目は傷付く」

そんなこと言っている間に用紙に書き込みは終わり、用紙を文に渡した

「彼女いない歴＝年齢ですか、予想通り過ぎて詰まらないですね」

「見るからに彼氏いないだろお前」

「あやや！よく分かりましたね、このストーカー野郎」

「決めつけんなよ！？まずは疑えよ！？いやと言うか誰がストーカー野郎だ！」

「来週から新聞を届けます、お楽しみにしてくださいね」

「あぁ、うん、マジで帰ってくれないかな…」

「では帰りますね」

あれ？今まで目の前に居たはずなのに聞こえてくるのは後ろから、つまり玄関から聞こえてくる

確かにいま目の前に居たはずなのに

「あるぇー？」

ガチャッと言う音と共に玄関が閉まる音が聞こえてくる

「スタンド攻撃？」

て言うかあの編集長、みかん全部食いやがった…

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「いま思えばあれ騙されたんじゃね？」

冷静になって見た、ちょっと友達に「俺ってさぁ文文。新聞の契約してなかったんだよねｗｗｗｗうぇｗｗｗうぇｗｗ」って言ったんだよ

うん、普通に引かれた

「あのクソ記者めぇ……」

「いや私に言われても困るんですが…と言うか普通は騙されませんよ」

「早苗が反抗期だぞ諏訪子」

「私達には反抗しないからいいのさ」

そして何を隠そうか後輩であるこの早苗に引かれたのだ
同じ学校で注目を浴びていた俺【悪い意味で】と注目を同じく浴びていた早苗【いい意味で】は何故かメリー繋がりで仲良くなった

今では早苗の家である神社に泊まったり飯食ったりと中々仲良くさせて貰っている

「相変わらずカズは馬鹿だな」

そしてのほほんと笑うこのロリは早苗の従姉妹らしい諏訪子だ、身体は小さいが早苗より年上とか

まぁ可哀想に、需要はあるからいいんじゃないかな、まぁ貧乳はステータスとか言うし…

「カズ？その目は気に入らないなぁ」

「諏訪子、その小さな身体のどこにゴリラみたいな握力がアアア

すっごい、ビクンビクンしちゃう…ッ

「それで先輩はここに何しに来たんですか」

ツッコミ無しですか、そうですか

「おいおい友達の家に来たら1つ、遊びにきたに決まってんだろJk」

「就活はどうしたんですか就活は」

「あぁ…来年から本気出す」

「大変だ早苗、ニートだよ、写真撮っていい？」

「しょうがないですね、特別ですよ」

キラキラした瞳で諏訪子は早苗を見つめる

そして早苗は無表情で鼻血をスプラッシュしながらシャッターを一回押した後諏訪子に渡した

なに然り気無く諏訪子を一枚納めてるんだ、駄目だこのロリコン…

手遅れだ…

「ニートだ」パシャ

「ニートですよ諏訪子様」パシャ

「…いや……ニートじゃないし…」

「始めてみるよ」パシャ

「あまり見かけない屑ですからね」パシャ

「……グスッ……ニートジャナイモン…」

「沢山いたら困るからね」パシャ

「そうですね」パシャ

「ヒック…警備員だもん…グスッ…」

「カズが沢山いたら困るからね」パシャ

「考えられませんね」パシャ

「ウエェ…ニートジャナイモン…グスッ」

泣かないもん…ニートじゃないから泣かないもん

写真に飽きたのか諏訪子はカメラをテーブルに置いてテレビを見始めた

「なんなの？新手の虐めなの？ニートの何が悪いの？」

「いや、ニートはもう悪いところしかないですよね」

ですよねー

いや分かってるんだよ、だけど働けないこの辛さを分かって欲しいね

「ウォッホン！……まぁ先輩が路頭に迷うのも見ておけないですし、家なら、まぁ…人手不足と言うか…」

取り敢えず寒いんだがこの神社にある炬燵は三角形の形なのだ、早苗と諏訪子とまぁ一人昼寝しているので入れないのだ

「諏訪子、炬燵に入らせろよ」

「もう一人くらい働く人が欲しいなぁなんで、その、まぁ、給料は少ないですけど、まぁ住み込みも」

「やだよ、テレビが見れないじゃないか」

「じゃあ膝に乗れよ」

諏訪子を無理矢理膝に乗せて炬燵に入り込む

「住み込みだからって、あれですよ？諏訪子様達の部屋に侵入なんか殺しますよ？ただ、まぁ……我慢できないなら私の部屋に…」

「むぅ……簡単に女性を膝に乗せちゃ駄目だよカズ」

「安心しろ、簡単に乗せないから」

そう言うと諏訪子顔を赤くしながら納得がいかないようにテレビを見始めた

しかし最近は寒すぎだろう、ちょっと可笑しいんじゃね

「諏訪子は暖かいな、あれだよな」

「小さい子は体温が高いとかほざいたら潰すよ？」

「すいません」

なんな股間がキュッとした

「あれですよ？決して私が先輩をとかそんなんじゃなくてですね、諏訪子様達の心配であって」

しかし暇だな、神社と言っても27日とかなら暇なんだな…神奈子は寝てるし、やることがないな

「しかしどうするんだい？就職が決まらなかったらニート？」

「ですからね、1月の初めから住み込みなんですけど手続きとか…」

「まぁ就職は最終手段はメリーの使用人…」

「メリーさんの使用人……？」

なんか知らないけど早苗様がむっちゃ怒っとる…

俺は鈍感じゃないんだ、コイツらのデレが難しいんだ（前書き）

１２月２４日、早苗の会話を修正しました

俺は鈍感じゃないんだ、コイツらのデレが難しいんだ

「んで、なんでメリーがここにいるのさ？」

「それは私が聞きたいわ、早苗に突然呼ばれたのよ」

神奈子がやっと目覚め、何故か分からんが早苗がメリーを突然呼び出し呼び出して置いて自分は俺を睨みながら飯を作り始めた

うん、改めて意味がわからない

「それで、さっきから諏訪子を膝に座らせているカズはなにか知ってるの？」

「いや、全く……あれ？なんで二人して睨むの？」

何故か神奈子とメリーに呆れたように見られる

分からんが取り敢えず俺が悪いのか？

「カズは決して鈍感じゃないわ、ただ馬鹿なのよ」

「そうだな、カズキは馬鹿だ」

「そうだね、馬鹿だね」

「え？何が？俺が悪いのか？なんなの？友達の家に遊びに来たら馬鹿にしかされないんだけど…」

泣きかけてる俺を他所に三人は何故か疲れたように呆れたように溜

め息をついた
メリーなんかどうしようもない目を向けてくる
え？なんなの？
「まぁこれなら簡単に奪われないって安心があるからいいんじゃないかな」

そんな事を呟きながら諏訪子は俺に項垂れてきた
こう見ると本当に年上なのか疑わしいが身内である早苗が敬語を使うくらいなんだからそうなんだろうな
「まぁ私にはどうでもいいけどね」
呟きながら神奈子は炬燵に潜り込んだ
そんな神奈子を見たメリーは一息ついた後同じく炬燵に潜り込んだ
こんな時出来る男なら料理でも作るんだろうが生憎料理なぞ作れないスクランブルエッグくらいなら出来るぜ
「炬燵で暖まってるとこ悪いですが、ご飯出来ましたよ」
ぬくぬくしている中、後ろの部屋から早苗の声が聞こえてくる
何時もなら三人でこの炬燵で飯を食べるのだろうが今は五人、後ろの部屋にあるテーブルじゃなきゃ食べられないのだ
「先輩、ちょっとどいてください」

と早苗はお盆に二人文のご飯を入れ運んできた

「ん？なんで二人？」

「私とメリーさんは此方で食べますので」

とささっとメリーの場所と俺がいた場所に料理を並べてしまった

「え？いや、みんなで向こう…」

「先輩」

「と思わない！あぁ！なんか今は三人で食べたい気分だなぁー！？」

諏訪子と神奈子の手を掴んで後ろの部屋にヘッドスライディングッ！そしてとある有名旅館の女将もビックリの音をならさずに扉を素早くかつ丁寧に占める

「こ、この俺が恐怖を感じている…ッ！？……ばっ馬鹿なッ！？この和樹が恐怖を感じているのかッ！？」

「伝わりにくいネタはやめて早く食べないと覚めちゃうよ」

「今日の献立はビックリドッキリワンダフルケーキ型ハンバーグだ、お得だな」

え？ワンダフル流行ってんの？

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「それで何かしら？」

和樹達が騒いでいる部屋を後ろに二人の女性、いや生温い二人の女豹がご飯を黙々とたべていた

「先輩が路頭に迷いそうですよね」

「？そうね、さすがに幼馴染みがニートは困るわね」

突然話を始める早苗にメリーは不思議そうに答える

そんなメリーに早苗は笑いながら言った

「もし先輩が路頭に迷うなら先輩は家で雇うんで安心してください」

「ふぅん…」

今！二人の女豹は壮絶な心理戦を繰り広げています！暫しお待ちください！！

「……」

「……」

凄い心理戦だ……ッ…踏み込む余裕がない…

「……」

尺稼ぎじゃないですよ！！

「……ふぅん、でもこんなの言うのもなんだけど給料低いんじゃない？あんな奴でも家なら雇えるわ、むりしなくていいのよ？」

語尾を強調しながらニコッとイイエガオでメリーは言う、そんなメリーに対して早苗はイイエガオで答えた

「…いえいえ！確かに給料と言う事に置いては少ないですけど先輩一人ならなんとかなりますのでメリーさんは安心してください！」

つまり給料とか誤魔化せばなんとかなんだよ！いいから黙って先輩をこっちに渡せ！！と言葉の後ろに隠れているのはメリーにとって簡単に理解した

「…そうなの！でも和樹は早苗の所は選ぶかしら？あ、別に和樹が早苗を嫌ってるとかじゃないのよ？ただ……友達より幼馴染みにたよるんじゃないかなぁって思うの」

つまり貴様の好感度じゃ和樹はなびかねぇんだよ、断れるんだから最初から誘わない方が幸せだぜ？と言葉の後ろに隠れているのは早苗にとって簡単に理解した

「あぁそうですね、でも！諏訪子様や神奈子様と馴染みの友達と一緒に働くってのは働くってことにちょっと怯えてる先輩は楽な仕事場になりますよね？」

つまりこっちは一緒に働くのは先輩にとって中の良い友達しかいない仕事場になるんだぜ？仲良く楽しくを好む先輩はどう考えたってこっちを選ぶに決まってんだろＪｋ
と言葉の後ろに隠れているのはメリーにとって簡単に理解した

「ふぅん…でもその辺は大丈夫よ、和樹を雇ったらまず間違いなく私の護衛みたいな役になるから、幼馴染みと一緒の仕事場になるのかしら、和樹は友達と幼馴染み、どちらに安心するかしら？」

つまりその辺は抜かりねぇんだよ牛乳がッ！！いいからさっさと諦めろよタコが
と言葉の後ろに隠れているのは早苗にとって簡単に理解した

「へぇ、じゃあ殆ど同じ条件なんですね」

「そうね、全く…私達に迷惑をかけているのをカズは理解してるのかしらね」

「そうですね、先輩ったら仕方のない男ですから」

「そうね、全く同感だわ」

そう良いながら二人は笑い合う
決して仲が悪い二人ではないのだ
ただ女性の勝負に友情など無縁なのだ
「クリスマスだってのに先輩は独り身ですし、可哀想ですね」
「そうね、と言うかむしろあの男に惚れる女性が居るわけないわよ」
「それもそうですよね」
惚れている二人の女性は笑い合う
底知れぬオーラを放ちながら

＋＋＋＋＋＋＋
「酷くない……俺だって頑張ってんだよ……俺だってさぁ……」
「あぁ～……うん、カズ、来年は良いことあるよ」
勿論隣の部屋は襖一枚じゃ声など遮れずに会話は全て和樹の耳に入っていた

物語は急遽として訳の分からない展開になる　※修正済（前書き）

※修正済みです

物語は急遽として訳の分からない展開になる　※修正済

日が落ち始め、赤色の夕暮れに照される自分の部屋をなにも考えずに見ていた
お世辞にも広いとは言えない部屋にテーブルが一つ、そして俺の向かいには幻想的な美しさを放つ幼馴染みに良く似た女性
しかし似ているのは外見だけで――

「――貴方の選択肢は２つ」

目の前の女性の声は透き通るように―そして脳に叩きつけるようによく聞こえてくる――
その声もそっくりで、俺に語りかけてくる

「見捨てるか…見捨てないか」

まるで意味を感じさせない微笑みで俺を見つめて問い掛けてくる
それだけで、似ていると言うだけで、無意味に頷いてしまいそうな自分を止められなかった
答えなんか出せなかったんだ――俺は彼女を救いたいー

なんでこんな状況になってるか、少し落ち着くために思い出してみようか
あれは何日間か前だ、ある女性から突然来た電話から始まった

＋＋＋＋＋＋＋＋

『久しぶりね～元気にしてる？』

「なんですか、今夜中の一時ですよ？金は貸せないですからね？」

『……あんたが私を見ている目がどんなものか分かったわ』

少し怒気を含ませた声にハハッと笑い返す

それもそうだろう、この人の電話は毎回毎回良い思い出がないのだ、出来るなら今すぐ切りたい

「なんですか蓮子さん？無人島にフレッシュウーマンでも探しに行くのなら断ります」

『そう言うのじゃないわよ、安心しなさい』

「じゃあ雪男？」

『…まず藤岡〇探検隊から離れなさい、今回は違うわよ』

「あぁ、じゃあ失われたアトランティスとかですか」

『ぶっ飛ばすわよ』

「すいません冗談です」

トーンが低い声に隙いれず謝る、この人は怒るとメリー並みに怖い、

電話の相手は宇佐美（うさみ）蓮子始めて会った時に「軽いＤＱＮネーム…？」

と呟いてビール瓶で殴られた
どこのマフィア映画だと、思わず突っ込む前に頭から血がスプラッシュして意識が消えた
あの時は酔っていたとかほざいたがどんな悪酔いだと数時間は説教したい

『ちょっと今から会いたいんだけど会えるかしら？』

「はい？蓮子さん今は東京じゃ？」

『今は京都駅よ、ちょっと急用なの』

「はぁ…？あれ？でも来年まで帰ってこないって言ってませんでした？」

そう言えば後ろからガヤガヤと聞こえてくる、今駅にいるのかなえ？今夜中の一時に駅にいるのか？そんな急用なのか？

『のんびりと休養する暇もなく急用が入ったのよ』

「寒……」

『駄洒落じゃないわよ！？』

休養してる時に急用、うん、上手くないね、そんな事を話している合間にホームで聞こえる高い音は聞こえなくなった、外に出たらしいやけに急いでるな、息を切らしているのが聞こえてくる

『あぁやっぱりそっち行きバスは終わってるわね』

「タクシーならあるんじゃないですか？」

『お金がないわ』

「ちなみに俺もないですよ」

『安心しなさい、ニートに借りるほど落ちちゃいないわ』

あぁ、教えたのはまず間違いなくメリーしかいない、教えちゃ駄目な人に真っ先に教えやがった

「しょうがないですね…今から迎えにいきますよ」

『ごめん、ちょっと急いで貰っていいかしら』

なんだ？なんか異様に焦っているのが手に取るように分かる、掴みにくい蓮子さんにしたらかなり珍しい雰囲気にこちらも無意識に構えてしまう

ちょっと可笑しいぞ

「…そこまで急ぐんですか？」

『そうね、こんな無駄話してる暇が無いくらいに』

これは、ふざけてる場合じゃない雰囲気だな

俺は立ち上がりバイクの鍵を取りながら寝間着だった服を脱ぎ捨てる、無造作にかけてあった黒いシャツとジャージのズボンを着込む

「一時間くらいで行きます」

『ありがとう…急いで欲しいけど事故らないでね』

「分かってます、切りますよ」

相手の返事も聞かずに携帯を畳む、ダウンを着込み部屋の戸締まりを確認せずに飛び出る

「たく…」

絶対にただ事じゃない、蓮子さんが狼狽えているのはメリーならいざ知れず、高校からの付き合いである俺は見たことがない

あの人からかかってくる電話はいつも平和じゃないんだ…いつも怪我をした記憶しか残ってない、たまには愛でも囁いて貰ってもバチは当たらないよな？

「雪降っとるし……そういやメリーが今日は降るって言ってたな」

急いで玄関を閉めて階段をかけおりる、さすがに雪が降る寒空に女性を待たせるのは男としてどうかと

今更ながら１２階なのにエレベーターがないとは製作者は馬鹿なのではないのか

一階に降りた先に駐車場に置いてあるバイクに向かう、シートを取り上げるとそこに現れたのは無骨な黒のデザインにカスタマイズされた車体

エンジンは特注品と言う有り得ないくらい金がかかった中型バイク

まぁ、これはメリー繋がりで破格の値段で…

「んなこと思ってる場合じゃねぇな」

シートを丸めて端に投げると鍵を差し込みエンジンをかけた

夜中には迷惑なエンジン音が響く

近所の‥就寝中‥の皆様！！‥就活中‥の私目が迷惑をかけて申し訳ありません！！（ゝω・´★）テヘペロ

「……いや……伝わりにくい上に駄洒落になってないな…」

アホやってないでさっさと行こう

アクセルを握った瞬間にまた携帯がなり始める

今から行こうと言うのに…

一回エンジンを切ったあと携帯を開くと蓮子さんと画面に表示された

「なん…」

『ひょわあああああああああああああああッ！？』

一瞬だけあまりの声量に携帯を耳から離し思わず携帯を離してしまう、すかさずキャッチしようと手で二三回ワタワタしてしまう

『か、和樹！？一時間と言わず今すぐ来てええ！？』

「れ、蓮子さん！？どうしたんですか！？」

今まで聞いたことがない悲鳴に急いで携帯を耳に当て聞き返す、携帯からは男性の怒声が聞こえてくる

『大ピンチ！！追い付かれたのよ！？私に戦う能力はないのよ！！』

「ちょっ！蓮子さん！？落ち着いてッ！！今どこに…」

『ひゃあ！？ちょっ…ッ…放しなさいよッ！！』

突然ドサッと音が聞こえてくる、そして携帯からは何かを落としたような大きめの音が聞こえてくる

『携帯落とした！！集合場所は‼二人の思い出‼よ！』

遠くから携帯越しに蓮子さんの声が聞こえる、そのあと何人かの足音が聞こえてきた後、携帯からは無音しか聞こえてこない

ヤバい、これは何か知らんがかなりヤバいぞ

「蓮子さん！おい！？蓮子さん！？だぁッ！！もうッ！！なんであの人はいつも！」

急いでエンジンをかけてアクセルを思いっきり捻る、この際信号とかスピードとか守ってる余裕は無い

「前科とか絶対就活に響くじゃねぇか…くだらない理由だったら怒鳴ってやるからなァッ！」

＋＋＋

この構図を知り合いに見られたら最悪だ

「なんか無用にあの女性速くないですか！？明らかに運動不足丸分かりの女性なはずなのに！」

「五月蝿いわね！？運動不足じゃなくて運動しないだけなのよ！！」

「太った女性が何時でも痩せられるみたいな言い方ね」

「五月蝿いわね！？追い付けないからって嫌味言わないでくれる！？」

「太ったに反応しましたよ、あれ気にしてますね」

「確かにちょっと気持ちふっくらしてるわね」

このまま止まってぶん殴ってやろうかと蓮子は思う、ただあの二人は見た目に反して有り得ないくらい強いのだ

先ほど駅に偶々居合わせた男性の警察四人を十秒とかからず気絶させてしまったのだ、本当にコスプレで堂々と誘拐をしようとする女性なのかと疑うくらい綺麗な拳法？だった

しかもあれで本調子ではないと言うのは会話から薄々分かる

つまり自分が行ったらまず間違いなく捕まるのだ

「ハァッ……き、キツイ！！」

こんな事なら普段から運動をしとけば良かったかなんて思う、酒ば

かり飲んでいた性かちょっと体重増えたし…

「疲れが出てるわ、あと少しよ」

確かに厳しくなってきた、息も厳しくなってきたし足もプルプルしてきた、残念ながら私の足は細くて美しくて綺麗過ぎるかわりに筋肉などないのだ

プルッップルの可愛い足なのだ

「き、キツイぃ！…あ、あの馬鹿はまだなの！？…」

「あの馬鹿？」

「…やばっ！…口は災いの元…ッ」

メイド服の女性が感づいたらしい、それはそうか

我ながら何回も和樹の事を呟いてしまった

いやだってさ、私だって女の子だしさ、男の子に助けを求めたっていいじゃない？いいわよね？

「美鈴、多分彼女は助けを呼んだみたいだわ」

「さっきの独り言ですか？そう言う能力ですかね？」

「それは分からないけど、彼女の独り言は私達が男達を倒した後ね……つまり」

ば、バレちゃった、と言うか無理！一時間も逃げ続ける体力なんて

私にはないわよ！？

「でも大丈夫そうですよ、彼女はもう走れなくなります」

「な、なんなのあの体力馬鹿達！？……きっつい…ハァッ…」

初めは数百メートル放れていた距離が段々と近くなって来ている、
しかも高速道路なのに車が一切走ってないと言う異常な光景
どこの魔術ですか？
しかも追いかけてきている二人のペースは全く変わらない
どこの幕の内ですか？

「は、走れない…ッ……きっつい！」

もう後ろを向く余裕なんか無い、と言うかすぐ後ろに来て手を伸ばしている

「……い、いやッ……」

触れた、どちらかの手が帽子に触れた

「かず…ハァッ……和樹っ…」

そして次の瞬間、肩を捕まれた

「なぁ！？い、いやァ！」

そしてチャイナ娘に羽交い締めにされた
捕まった、完璧に捕まってしまった

「…ッこんの…ふんッ！」

もがいてもびくともしないチャイナ娘の足を思いっきり踏んでみた

「いっ！？ちょっと痛いです！！～～っう！」

「ちょっ…ハァッ…微動だにしないって…女性としてどうなの……？」

「さて少し静かにして貰いますよ」

そう言いながらメイド服の女性は突然どこからともなくナイフを取り出した

「へぇ！？ちょっと、嘘でしょ…？」

「安心してください」

「い、いや…」

ゆっくりと少しづつこちらを歩いてくるメイド女はナイフを手でクルクル回しながら弄ぶ

「か…和樹……」

「あ、あはは……これ完璧に私達悪者ですね」

後ろの女は笑う、今の私にはそれも怖くて、なんか周りの暗闇も怖くて、上手く考えられない

「和樹っ……和樹！」

いつもこんな怖い時はあの馬鹿が近くでへらへら笑ってる癖に、今は居ない

自然と私は和樹の名を読んでいた

「この馬鹿……いつも居なくて良い時に居るくせに！」

さっき助けを呼んだのが和樹だからなのか

私が無意識に和樹に助けて貰いたいのかよく分からないけど

「今私は凄く怖いのよ！速く、速く来なさいよクソニート！」

メイド女がナイフを構えた時とっさに目をつぶってしまった、あぁなんか、最後に凄く恥ずかしいこと叫んじゃったわね、なんてお気楽に思ってしまった

「…あ、あれ？」

刺されるって案外痛くないのか？なんて我ながらかなりお気楽に思いながら目を開けた

まず最初に写るのはメイド女の後ろ姿だった、よく見れば私を拘束しているチャイナ娘もこちらではなく前を睨んでいたのを見ていた

視線を前に向けるとそこには待ち兼ねた私のボディーガードが立っていた

「か、和樹！！」

私がつい名前を呼ぶとメイド女は和樹に向かって一歩間を積めた

「あなたが援軍かしら？」

「あぁ、援軍だな……いやな？途中から信号が壊れたみたいに動いてないんだよ、さらには高速道路に車が一台も走ってない、さらにさらに入り口に人が一人もいないんだよ、だからゲート壊しちゃった……いや不思議だらけでな、感覚が狂いそうだった」

「あらそう？それは大変ね」

「これ全部あんたらがやった、なんて言ったら非日常なんて案外近くにあるんだなって素直に感じるよ、ある意味…難しい本に書いてあることより厨二くさい本の方が正しいのかもな？」

「お気楽ね」

そう言いながらメイド女は無表情で和樹を睨んでいた、かく言う私も今の和樹から目を離せないでいる

私の目に写るのは無造作に転がったバイクと今まで見たことの無いような表情を浮かべた友達がフルフェイスを取りながら立っていた

「一ついいかな？」

「なにかしら？」

フルフェイスを地面に投げつけてうつ向いていた顔をあげた、その雰囲気を、異様な感覚を感じて

「か、和……樹？」

その表情は、見て分かった

「そのナイフで何するつもりだったんだ？」

あれは完璧にブチギレてる和樹だ……

和樹の実力※修正済（前書き）

恐らくまた修正します

和樹の実力※修正済

――状況は最悪だ

「美鈴、そのまま下がりなさい」

「ちょっ、ちょっと！」

蓮子さんは抵抗しているが、あれは無理だろう
なんせ良い太ももだ、力強い良い太ももだ
あれは蓮子さんじゃ抗えない太ももだ

いや、なんかエロく言っているみたいだがそんなことはなくて上手い具合に鍛えられたあの足を見れば結構鍛えられているのは分かる、恐らくだが何かの武術をやっているのだろう

前に出てるメイド女…メイド？
いやなんでメイド服？あれ？……なんでチャイナ？よく考えたら可笑しくないか？
いやと言うかよく分からないことばかりだ、そもそもなんで蓮子さんはコイツらに追いかけられているんだ？

普通にしているが高速道路に車が走っていないと言う有り得ない状況もなんなんだ？

考えれば考えるほど意味不明な事ばかりだ、しかし向こうから感じる敵意は本物で此方がのうのうと考える時間なんか与えてくれはし

ない、冗談なんかじゃないのはこの雰囲気が答えている

しかし綺麗な太ももだ

あ、これはちょっとエロく言った

「来ないの？」

「……五月蝿い」

「…そう」

メイド女はナイフを逆手に持ち大きく後ろに構え、何も持っていない左手を此方に向けた

身体を真横に向け、ナイフを俺からは見えない位置に移動させる

―待ちの構え

見て分かった、向こうは此方が来るのを待ち一撃必殺を御見舞いする形、左のナイフは刃渡り七センチ程度の短いサバイバルナイフ

恐らく、あれは投擲ナイフか？

此方に合わせて右手、体を反らせる――いや、もしかしたら彼女ならナイフを即座に出せるのか？

あの構えからは投擲するつもりは無いだろう

「クソッ…やっぱりただの女性じゃねぇよな…」

迂闊に飛び込めば右手のナイフを突き立てられる、此方が一撃入れても間違いなく刺されるビジョンしか浮かばない

―無傷は不可能か？

自分に問い掛けるが答えはでない

――ジリ貧だ

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

ｓｉｄｅ変更

「……、やっぱりだだの男性のではないわね…」

それもそうかと咲夜は改めて思う、今この場は八雲紫によって一時的に現代から‼ 切られている‼

あのスキマ妖怪が自ら入れないとこの場所には来られないはず、つまりだ…彼がここに来れた理由は２つ考えられる

一つ目は八雲紫が望んでこの場に呼び込んだ

２つ目はもっとも確実性がある理由だ、彼が八雲紫の能力を受け付けない能力がある

だがただの人間が境界を無視できる何らかの能力を持てるのか？有り得ない話ではない、何せ自分は‼ 時間を操る程度の能力‼ を持ち合わせている

これは人間には過ぎたる力だ、それを人間である私が持っている、

自分と言う確実な例が存在するならば、この考えは間違いない可能性がある
しかし確実ではない
八雲紫が何を考えているのか、それは私には分からない
どちらにせよ八雲紫にどんな理由で有ろうと干渉した彼は間違いなく普通じゃない――
「埒があかねぇな？」
間合いをジリジリと積めてくる彼が突然口を開いた
――来るか？
彼は足を肩幅に開き両手を前に突きだして腰を小さく落とした
端から見れば可笑しな構えだ、両手全く同じ位置に構えている
「……――そうね、お互い見つめあってるだけなんて詰まらないわ」
「そうかい……んじゃ、行くぜ？」
「えぇ、来なさい」
後一歩踏み出せば私の間合い、彼はそれが分かっているように：その一歩：で止まった
――どうくる？
構えからは想像出来ない
接近戦はあまり得意ではないのだ、しかも私の能力は現代では使えない
理由は簡単だ、私の力が規格外の能力過ぎただけ

時間を止める世界が広すぎるのだ、幻想卿の時間でも止められるのは数秒間だけなのに幻想卿より何十倍も広く、幻想卿より何百倍も活動している意思を止めることは不可能だ

つまり、ナイフを投擲すると回収出来ない為接近戦で闘わないとならない状況だ

だが相手は此方と同じ人間な上に生温い現代の人間だ
――勝てる…ジリ貧にはさせない、一撃で終わらせる

＋＋＋＋＋＋＋＋＋

腰を深く落とすのと同時に右手を引く
そして意識を白から黒に塗り替える

師曰く常識とは自らの眼で捕らえる世界だと
ならば自らを自らの眼で世界を変えよう
脚はバネに変わる――折り畳む脚は軋む硬いバネ
、ギシギシと唸りをあげながらバネは小さくなっていく
そして、完全に折り畳まれたバネを押さえ自らの意思を鍵とする

――外せ―

「ぜァッ！」

一気に弾けたバネは身体を持ち上げ相手に向かって弾丸となり相手を殺す、突きだした右腕は彼女の顔に真っ直ぐ伸びる

「ハァッ！」

刹那に交わされたやりとりが、彼女に決断を決めさせる、彼女は上半身を大きく反らす―スウェー状態になった顔があった場所に俺の右腕が通りすぎる

避けられた

その隙を彼女は逃さない、この体制から放たれる一撃に重さはない、だが彼女の右手にはサバイバルナイフ…無茶な体制から放たれるナイフの一撃は俺の頬に真っ直ぐ向かってきた

「か、和樹ぃ！？」

――そんなの分かっている

必ず来るのは想像出来た

だからこそ俺は顔を僅かにずらしながらナイフに向かって顔を動かした

「……っ！？」

短いナイフが頬に食い込む、信じられないように彼女は目を見開きナイフの手を止めた

思わずニヤリと笑ってしまう、そんな俺を見た彼女はさらに目を見

開く
コイツは俺が必ず避けると思い込んだ
「見謝ったなァ！メイドォ！」
足を…伸びきったバネは力を無くし横に倒れるー
「しまっ…」
全体重を肘に乗せながら彼女に覆い被さる業
縮肘打激ーシュウカクダゲキー
「遅ぇよッ！」
起き上がろうとしていた上半身に右肘が突き刺さる、倒れ込む俺の
体重と重力に加え相手をが起き上がってきた為
右肘は確実に溝に入ったまま二人は地面に叩き付けれた
「カッッ…ゴホッ…！？」
大きく息を吐き出すと彼女は大きく噎せる、ナイフは頬から抜け血
を地面に撒き散らせながら転がっていった
「ぐっ…！？」
「だから遅ぇよッ！」
右肘を軸に上半身を起こし左の拳が顔面に突き刺さった
ビクンと体が一回跳ねた後、糸が切れた人形のようにパタリと動か

なくなった

終わりだ、女性じゃこの形から入った二撃に耐えられないだろう
勝敗は言うまでもなく相手の異常性を考えなかった彼女の間違いだ

「咲夜さん！？」

チャイナ女が焦ったように叫ぶ、蓮子さんを突き飛ばすように放しながら此方に走ってくる

「…チャン…」

蓮子さんを離した、チャンスだ
そう思い視線をもう一人のチャイナ女に向けた

――つもりだった
そのスピードは走るに該当するようなスピードではなかった、百メートルは離れていた距離がチャイナ女は――……すでに‼ 目の前に居た‼

「ツァアアァッ！！」

「ガァッ！？」

僅かに飛び上がっていたチャイナ女は此方が理解出来るスピードで動いていなかった
大きく身体を捻らせての回り蹴り――ソバットが胸に突き刺さった

「和樹！？」

それは飛んでもない衝撃で地面に一切触れずにぶっ飛ばされ三メートルは後ろにあったガードレールに背中を叩き付けられた

「かはッ……！？」

今度は此方が大きく息を吐き出しながら地面に倒れ込んだ

「か、和樹！！」

横から蓮子さんが滑るように横に駆け付けた

だがそんなことを気にしている余裕は無い

何が起こった？なんで俺は道路に倒れこんでいるんだ？

「ちょっと和樹！？しっかりしなさいッ！」

ボヤけた視線でチャイナ女を見ると既にメイド女を背負っていた

――――そうか、蹴られたのか

ハッキリしない意識でまるで他人事のように理解した

あまりにも強すぎた蹴りなのか、痛みが無く息が上手く出来ない上に目の前がボヤける

口は鉄の味が染み渡り下がヒリヒリと傷んだ

耳だけがハッキリとし、チャイナ女らしき声と蓮子の叫ぶ声が透き通って聞こえた

「有り……得ねぇだろ……ッ…」

大の大人が十数メートルも女性の蹴りでぶっ飛ばされた
ふざけた理不尽だ

見間違いか、どうかは判断出来ないが俺の目は虹色に妨げられた―
―比喩なんかじゃない
確かに虹色の光が彼女の身体に纏うように光っていた

「和樹！？和樹！」

「聞こえて…ますよ…ッ」

視界がクリアになっていく、痺れたように動かなかった手足の感覚が僅かに戻っていくのが感じた
いま俺は何秒倒れていた？

「ぐのぉっ……」

「ちょっと！たてるの！？」

涙目になっている蓮子さんを横目に俺はガードレールを支えにして身体を起こした
全く脚に力が入らないのを無理矢理立ち上がりチャイナ女を睨む

「…あ…り？」

居なかった、いやそれより可笑しいのは

車が二台――目の前を横切った

「な、なんだよこれ？」

「……」

横にいる蓮子さんも驚きを隠せないのか、俺の腕をとり支えになってくれながら周りをみていた

ついさっきまで殴って気絶させたメイド女も俺をぶっ飛ばしたチャイナ女も――消えた

今までの静寂など無く、人が活動している騒音が小さく聴こえてきた

――訳が分からない

「痛っ――――ッッ！アアッ！？」

突然頬から有り得ない痛みが突き刺さる、反射的に離れようとするが脚に力がはいらなくてそのまま倒れるようにガードレールにもたれ掛かった

「その傷塞がないと」

「は、はぁ？」

よく見れば蓮子さんが心配そうにピンクのハンカチを頬に当てていたあ、そう言えばナイフ刺さったんだ…

「痛い！？蓮子さん痛いよ！？」

「はいはいワロスワロス」

「痛い痛い痛いぃっ！？グイグイ押すなよ！？ナイフ刺さったんだぞ！？」

「はいはいワロスワロス」

取り合えず色々考える前にこの傷をなんとかしないと痛みでマッハだ

和樹の実力※修正済（後書き）

タイトルに一般人とか書きましたけど
「咲夜さん（能力無し霊力など無し）にメメタァ出来るなら一般人じゃないのかな？」
なんてふと思いました

追想ー桜の記憶（前書き）

和樹の過去そ

追想ー桜の記憶

桜の木葉が舞い散る空き地に青年と少年が草が生い茂る茂みに伏せていた
その手には少年には不似合いな銃を抱えていた、所謂ＡＫ―４７ロシア生の銃だ

『ＨＱから各部隊へ、デルタチームが敵の伏兵を捕らえた、恐らく伏兵はまだ複数隠れているはずだ。警戒を強めよ』

『ファントム了解』

『ゴースト了解』

『アルファ了解』

青年達の耳に取り付けられた無線からそれぞれ声が聞こえてくる、
その無線に隣の青年は顔をしかめた
そして少年の肩を叩く

『バレたなカズ、退くぞ』

無線からは特徴的なロシア語が聴こえてきた、その言葉に頷きながら匍匐で後ろに下がっていく
青年は周りを警戒しながら続くように下がっていく

『ボルト、なんでバレたんだと思う？』

カズと呼ばれた少年が口を開く

その疑問に少し考えながら口を開いた

『作戦はバレた可能性は低いな……正直分からん』

『…もしかしたら桜じゃないか？』

『桜？』

『そう、この桜の量は異常だろ？伏せていたら自分に積もったとか？』

そんなカズの言葉にボルトと呼ばれた青年は少し笑う、そして中腰に起き上がり周りを見渡した

「無線はもう平気だ」

「あいよ、そんでどうよ？俺の考え」

二人は銃を背中にかけると一気に走り出した

カズが小型のマップを表示機械を取り出すとボルトの前に出た

「もし桜が作戦を台無しにしたら美しい薔薇には棘があるだったか？まさにそれだな！」

「綺麗すぎる桜は棘がある？あながちあってるかもな」

二人は走りながら視線を上に向けた、そこには視界を覆うほどの桜の花弁が散っているまさに幻想的な光景が広がっている

「しかし、いくら公園に桜を植えると言ってもやりすぎじゃねぇか

？」

「ふんッ、ロシア政府は加減てものを知らないんだよ」

ボルトは投げ捨てるように言う、和樹もそんなボルトを見て呆れるように笑った

「ボルトッ！」

和樹が焦ったようにボルトの肩を二回叩くと二人は自然な動作で飛び込むように地面に伏せた

そして肩にかけたＡＫをゆっくりと手に取った

ボルトが眼を凝らして花弁が舞い散る間をよく見るとアメリカの国旗が入った軍服をきた兵士が四人、桜をうっとおしそうに歩いていた

その距離はかなり近いのだ

『カズ、何人いる』

『三人か？』

『いや四人だ、まだいる可能性があるな……多すぎる、ここは通らせるぞ』

『了解』

その言葉を聞きながら和樹はつい兵士を見ずに桜を見てしまった

『桜に助けられたな』

『黙れカズ』

ピシャリとボルトに注意されて口を閉ざす

よく見れば銃座が搭載された装甲車まで止まっている、さらに兵士は全員で七人

日汗を流しながらつい思う、桜に助けられた

『無理だな…カズ、ゆっくりと左に行け』

『了解』

匍匐しながら左に動いていく中、和樹の目の前に桜の花弁が一枚、銃に乗ったのを見た

何故か、その光景を見た和樹の頭には、顔が思い出せない誰かが微笑んでいる光景が過った

――何故かその笑みは、哀しいほど美しい笑みだった

状況整理の話し合いは大事だよね

少し薄暗いホテルの部屋に俺はベットに座り込んでいた、その頬にはガーゼで傷口を押さえている応急処置がされていた、蓮子さんはガーゼをテープで貼りながら救急セットをバックにしまい始めた

「……」

外は既に明るく十一時は回っていた、そしてそれを確認するために俺は携帯を開いた

メールが一件

勿論メリーからなのだが、俺が朝から家にいないからどこにいるのかと言うメールだ、そう言えばメリーと早苗達の家に行くと約束していたんだっけ…

そして俺の居る部屋はピンクの薄暗い明かりに一つベットにアダルティな番組しかやらないテレビさんにそっと「俺だよ！！」と語る近藤さん

うん、いま俺はラブホテルにいます

いや、違うよ？やましい理由は無いんだよ、ただ蓮子さんがうちは嫌だとか言うからさ

いや、なんかこう言うとそう言う意味に聞こえるかもしれないけど違うんだよ

「なんて返信しよう……」

いま？蓮子さんとラブホテルに居るよ

いや、殺される、間違いなく殺される

「どうしよう…」

「なんでもいいじゃない？」

根本的な元凶がほざきおるわ、取り合えず！ 病院なう！ とでも送っておくかな、この傷も誤魔化せるだろ

それよりだ

「さて、蓮子さん？」

「分かってるわよ」

蓮子は疲れたように息を吐くと俺の隣に腰をおろした、そしてバックを手に取ると中から一枚のノートを取り出して俺に渡した

「これは？」

題名はなにも書いていない、さらに中身を少し捲ってみると文字がビッシリ書きつられていた

蓮子さんは俺の手にあるノートを捲るとあるページでてを止めた

そこに赤色で書かれた題名は：能力の考察：

「こいつは…」

うっすらと頭を過る

「これはメリーの能力を考察、って言っても文献や本を見ながら考えたんだけどね、これ見て」

そう言いながらページの真ん中当たりを指でなぞる、そこに書かれているのメリーの能力と

――俺の能力を照らし合わせながら書いてある考察だった

「これは一昨日、私がこの考えにたどり着いた時に行きなり起きたのよ」

そう呟きながら蓮子さんは思い出すように語った

＋＋＋＋＋＋＋

物静かな雰囲気を放つ喫茶店、人は全くおらず各々が発する静かな音が店に響く

その中にテーブルにペンを叩く音が大きめに響く

「つまりよ…」

そう呟きながらペンをノートに走らせるのはうら若き乙女の特徴的

な帽子を被った美人が頭を捻らせていた

その美人は宇佐見蓮子、職業先に有休を貰い自宅である東京に里帰りしのんびりと休みを満喫するつもりだった

だが、宇佐見蓮子と言う女性は不器用な女である

「あぁもう…、分からん」

せっかくの休日なのに何故か図書館にまで脚を運び本を数冊借りたあとノートにボールペンまでもわざわざ買い、ゆっくり出来る喫茶店で頭を悩ませていた

「駄目だ、整理しよう」

そう呟いてノートを見直した

‥能力についての考察‥

まず能力とはなんなのか、そこから考えてみよう

まずは能力とはある特定の人物が奇跡的な確率で得る、ある意味人の限界地点だ

俗に言う超能力やエスパーに近い力、その力は様々な物がある、私の宇佐見蓮子の能力は‥星を見ただけで時間が分かり月を見るだけで今の場所が分かる程度の能力‥

なんとも限定的な能力だがこれは推測や計算で出しているのではなく直感的に理解出来る

つまり意図して能力を使っていないパターンだ

そしてもうパターンはマエリベリー・ハーンの能力：境界を操る程度の能力：
これはある意味超能力に近い、この能力の凡庸性は高過ぎるがそれには能力とは別に自分の知能がかなり左右される
ただ単に境界を弄ると言っても簡単な物ではない、死の境界を弄って人を殺す

やろうと思えば出来ないことはないだろう、たがこれをやるには：死と言う概念：や：生と言う概念：を理解しなければならない
そしてその人が境界によって死ぬならば廻りに合った

：人の境界：友や親に出会うはずだった人物やその先にまつ運命、など上げれば霧のない境界を正常に整えなければならないかもしれない

かも知れないだ、この能力は理解するには本人でなければ分からない非常に使い勝手が悪いがとてつもなく凄まじい力が隠れた超能力

そして能力は直感的や知能的に扱うパターンの他にもう1つ潜在的なパターンが存在する

鷹島和樹の：心を力に変える程度の能力：

これは全く持って理解が難しい能力だ

本人が話すにはこれは酷く曖昧な能力らしい、心と言うには感情に近いらしい

和樹自信が怒ったとき、泣いたとき、辛いとき、その能力は勝手に発動すると思いきや発動するときと発動しないときがあると本人は言う

長くなるのでこの考察は後に流そう

「ここまでは良いわ、問題はメリーの事よ」

メリーは:境界を操る程度の能力:を完璧に使えない
本人が言うには能力を得たときに何かに能力を使った感覚が合ったと言った

つまりメリーは無意識に:何かに:能力を使っている

「ここよ……メリーは何に能力を使っているのか、自分に?…無くは無いわ」

「お待たせしましたチョコケーキです」

これは和樹に聞いた話だが知り合いの能力を使える人物は:あらゆる武術を扱う程度の能力:が居たと言う
和樹が言うには知り合いは無意識に能力を使ってしまう時が度々あったらしい
それは自分に危機を感じた場合や何気ない動作から色んな場合に能力を使ってしまうらしい

「いや違うわ、これも結局は無意識に使ってるってことよ」

「お待たせしました苺パフェです」

だが、これはメリーに何かがあるから能力は勝手に発動しているのだ、つまりメリーは能力を無意識に使ってしまう状態にいる

たがメリーは危機に合っている訳でもないし無意識に使ってしまう能力でもない

「うん……分かんない」

「お待たせしました紅茶です」

持ってきたウェイトレスに片手で挨拶をする

うん？ウェイトレス？

「あら思い付いたの？」

呆然と視線をノートから目の前に移すと

「め、メリー？」

目の前にはパフェやらケーキやら飲み物の皿やグラスが空になって大量に置かれていた

そして目の前には紫の服を着たメリーが入るのだ

「はぁい♪」

なんとも胡散臭い笑みで片手を上げる、そんなメリーになんとも言い難い違和感を感じた

「……誰？」

「あら？やっぱり分かる？」

簡単に肯定しやがった、誰だこの胡散臭い女は？

私はノートを閉じてバッグに仕舞い込んで彼女を睨むように見た

「あら怖いわ、そんな顔してるとシワだらけになるわよ？」

「五月蝿いわね、誰よ？」

「あら？シワ気にしてる？２４になるとさすがにシワ…」

「無いわよ！？まだピチピチよッ！」

「私、現代ってよく分からないけどピチピチって死語じゃないの？」

ぶっ飛ばしてやろうかこの女、初対面に対してづけづけと言ってくれる

目の前のそっくりメリーは扇を取り出すと扇で隠しながら笑った

「私は八雲紫、ゆかりんって読んでちょうだい♪」

「八雲さん、なんか、私に用ですが」

つれないわと泣き真似をし始める、なぜだが分からないがこいつの

行動は一々イライラくる
簡単だ、この女は見下している

「そうね、あえて言うなら解答かしら」

「はぁ？」

何を言っているだこの年増は、いや見た目はメリーと変わらないが
明らかに年増の雰囲気と言うかもう感じる

「そう、メリーちゃんの秘密」

「…はぁ？」

つい気を抜いた返事をしてしまう、ちょ、ちょっと待って
なんでこのそっくりメリーが知ってるの？いやそもそもなんで私の
目の前にいるの？

「訳分からないって顔ね？でも安心しなさい、ちゃんと教えて上げ
るわ」

目の前のそっくりメリーは手のひらをこちらに向けた後に拳を開いた

「…ッ」

その手のひらにはパックリと開いた裂け目にいくつもの境界と言う
視線が行き交う真っ暗な空間に大量の目

それは――メリーと全く同じ能力の表れだった

「な……な、なん、なんで？」

「あら？考え通りよ、貴女の思っている通り」

つまり

この突然現れたそっくりメリー、紫だっけ

この人はメリーの無意識を知っている？

「でもね、詳しく教えられないのよ」

「な、なんでよ？」

「……そうね、鬼ごっこしましょ」

その言葉に余計に訳が分からなくなる、何を言っているんだろう？

言葉の順序がわかってないの？

「勝ったら全部教えて上げる、負けたら…そうね、メリーちゃん」

「メリー……？」

「貰うわ」

その言葉を聞いたとき、喫茶店の空気が止まった

カランとグラスに入っていた氷が溶けた音がする

そして目の前のそっくりメリーは扇を閉じた

「……レズ？いや、私はノーマルだわ、どうぞ頑張ってください」

「……」

そして時は動き出す

「……あぁ、貴女、馬鹿ね」

「な、なにをッ！？言うに書いて馬鹿とはなによ！？」

さっきからだけどちょっと失礼じゃない！？私は和樹じゃないのよ、そんな馬鹿馬鹿言われる筋合いはないのよ

「上等よ！鬼ごっこしてやるわよ！」

「あら、いいの？」

「良いわ、鬼ごっこの蓮子ちゃんと言われた私を嘗めんじゃないわ

よ！」

そう指を突き付けるとそっくりメリーは胡散臭い笑みを浮かべながら立ち上がった

「そう、じゃあ明日の１２時からスタートよ」

そう言いながら喫茶店から出ていった

「あれ？乗せられた？……」

あれ？しかもアイツ、パフェとか払っていった？

「嘘ッ！？これ私が払うの！？」

間違いない、私はあいつをぶっ飛ばす……

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6880z/

東方想譲心

2012年1月3日00時49分発行